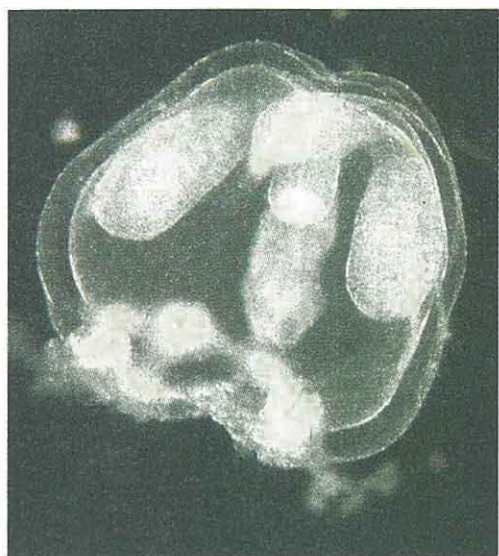


マキヒゲクラゲ



傘の縁に巻きひげが収縮しているマキヒゲクラゲ

久保田 信

12



クラゲ界の「ひげ男爵」マキヒゲクラゲは、傘径3・2ミほどにしかない小さなヒドロクラゲの一種である。田辺湾では少数個体しか見つからない。
本種の特徴は、和名が示す

ように「巻きひげ」が多数あることだ。このひげは正式には糸状体という装置で、画像のように傘の縁から外へ向かって伸びて巻き上がった収縮している。
巻きひげは、4分の1の円周当たり、最多で15本もあるが、どのように使われているかはっきりしない。一般的に考えられる餌の捕食用には使われていないようだ。
通常のヒドロクラゲは、体の位置を知る装置「平衡胞」が、4分の1円周当たりに2個ずつあるが、マキヒゲクラゲは、なぜか1個ずつしかない

いことが多い。このように少数の感覚器しかなくても、どうして体のバランスが取れるのだろうか。

口柄は短いので、傘口から突き出すことはない。口柄支持柄や口触手はない。口唇は体が十分成長すると十字の形になるが、通常はその発達が悪くて丸くなる。4個の生殖巣は4本の放射管のほぼ全長にわたって形成され、雌雄異体である。

マキヒゲクラゲは地理的分布は広く、南日本全域で捕れ、南西諸島から本州中部にかけての太平洋岸、瀬戸内海および対馬などで記録されている。海外ではインドー西太平洋沿岸や地中海に分布する。

クラゲと異なり、本種のポリプは野外からは見つからず、生殖体を形成したポリプも不明なままである。これまで地中海産のクラゲを使って、誕生したばかりの初期ポリプが確認されているが、謎多きクラゲである。

(京都大学准教授)